

メッセージアウトライン マタイの福音書8：1～4 「主よ。お心一つで」

[1-2]「イエスが山から下りて来られると、大勢の群衆がイエスに従った。すると見よ。ツァラアトに冒された人がみもとに来て、イエスに向かってひれ伏し、『主よ、お心一つで私をきよくすることがおできになります』と言った」

イエスはイスラエル北部のガリラヤ湖に近い山に弟子たちとともに上られ、そこで多くのことを教えられた。そこにはまた弟子たちとともに多くの人々が彼らを取り囲むように聞き入っていたことであろう。イエスの教えられたことはマタイ5章から7章にかけて書かれており、そこでは自分の無力さ、罪深さを思い、真にイエス・キリストを救い主と信じ、より頼む信仰を持たなければならないことを教えられ、そこから出てくる行い、天におられる神のみこころを行う生き方こそ、狭い門から入り、細い道を行く生き方であり、良い木が良い実を結ぶ生き方であり、岩の上に土台を据えた賢い人の生き方であり、まことのいのちに至る道であると教えられた。

そしてこの8章からはイエスが神の子、救い主であることを示すために、さまざまな奇跡をなされたことが記されている。その最初の奇跡が1～4節までに書かれているツァラアトに冒された人のいやしの奇跡である。ツァラアトという病気は旧約聖書レビ記13～14章などに書かれている症状で日本語聖書では以前はらい病(ハンセン病)と訳されていたが、レビ記を読むと、これは人体ばかりではなく、家の壁や衣服の表面などにも現れる症状であり、らい病ではなく、日本語では適当な訳語がなく、結局原語のツァラアトをそのまま用いている。ツァラアトはイスラエル人にとっては特別な意味があり、それに冒された人や物は神の前に汚れたものとされ、自分の衣服を裂き、口ひげをおおって、「汚れている、汚れている」と叫び、町の外にひとりで住まなければならなかった。衣服などであるならばよく洗われ隔離されなければならなかった。そして人や物が一定の時間後にきよくなっているかどうかは祭司が調べる必要があり、その結果、治っていることが確認されたならば、ツァラアトに冒されていた人の場合は代償のささげ物として小羊や穀物のささげ物などを祭司のところに持って来て、祭司はそれを罪のきよめのささげ物として主なる神にささげる。祭司はその人のために宥めの儀式を行い、その後彼はきよいものと認められる。→レビ記14章

なぜ聖書にこのような記事があるのか。それはこのツアラアトが誰にでも冒される可能性のある病であり、それに冒された者は神に近づくことができず、神の前に汚れた者とされ、神の民として生きることができず、隔離され、神の前に罪ある者とみなされた。

このことはすべての人間が神の前に罪ある者であり、神に近づくことができず、そのためには病の癒しが必要であり、祭司による回復の宣言が必要であること、すなわち、神の前に罪ある人間である私たちは神との交わりを回復するためには死と滅びに至る罪という病から贖われる必要があり、そのためには贖い主、救い主が必要であることを指し示しているからである。

贖いとは代価を払って買い取るという意味であり、聖い、真の神の前に罪ある私たち人間が受けるべき神の刑罰を罪のないお方が代わりに受けて下さり、そのようにして刑罰の代価を払ってくださったゆえに罪ある者が救われ神のものとされるという意味である。

さてイエスが山から下りて来られた時、大勢の群衆がイエスに従ったが、それは真に罪からの救いを求める求道者としてではなく、さまざまな力あるわざ、奇跡を起こす力ある人物を一目見たい、あるいはその話を聞きたいという人々が集まってきたのであろう。

ところがそのような群衆に紛れてなんとツアラアトに冒された人がイエスのみもとに近づいて来たのである。本来ならば彼は宗教的に汚れた者として他の人々に近づけない存在である。人々から罵倒され、のけ者扱いされ、石を投げつけられたかもしれない。しかし、彼はイエスのもとにやって来た。彼はまずイエスに向かってひれ伏した。この「ひれ伏し」ということばは原語では「拝んで」とも訳せることばで、すなわちイエスを礼拝したということである。ユダヤ人は十戒にも記されているように真の神でないものを拝むということは偶像礼拝として厳しく戒められていたが、彼のしたことはすなわちイエスを神として認めていたことになる。それがいつからかは分からないが、彼がイエスの行われた様々な奇跡や権威あることばを語られ、教えられたことを聞いて、ひそかにイエスに対する信仰を持ったのかもしれない。

彼は言う。「主よ、お心一つで私をきよくすることがおできになります」

きよめるとはこの場合、病気が癒されることであるが、ツアラアトの病は宗教的に汚れたものであるもので、それをきよめるということは、ツアラアトが癒され神の前に汚れた状態から回復されることを意味している。

「お心一つで」とはイエスが確かにきよめる力を持っていると信じ、彼がきよめられるのはそのイエスの心、意思次第であると彼が思っていたことがわかる。

[3]「イエスは手を伸ばして彼にさわり、『わたしの心だ。きよくなれ』と言われた。すると、すぐに彼のツアラアトはきよめられた」

人々の忌み嫌うツアラアトに冒された男をイエスはなんと手を伸ばして彼にさわり、きよめられた、すなわち癒されたのである。これは多くの群衆の見ていた前で起こったまぎれもない奇跡であった。イエスはツアラアトを移されはしまいかと恐る恐る手を伸ばしたのではない。イエスは心からの同情と愛をもって彼にさわり、「私の心だ。きよくなれ」と言われたのである。ツアラアトに冒された男は「主よ、お心一つで」と遠慮がちに申し出たがイエスは「わたしの心だ」と言い切られたのである。このイエスのことばを聞いた男はどれほど心励まされ、強められ、慰められたことであろうか。同じユダヤ人であるのに、その共同体から追い出され、孤独と苦しみ悲しみと絶望のうちただ一人生きていかなければならなかった彼の苦しみをイエスはご存じであり、愛してくださり、救いの手を差し伸べてくださったのである。

ここから私たちが教えられることはツアラアトに冒された人と同様に、私たち人間は神から遠く離れ、苦しみと悲しみと問題だらけの人生の中にある者であるが、そのような私たちに近づき、死と滅びに至る罪という病を癒し、救い出すためにイエスは「わたしの心だ。きよくなれ」と言って救いの手を差し伸べてくださる愛に満ちたお方なのだとということである。

マタイ11章で悔い改めて神に立ち返るようにと福音を宣べ伝えていたバプテスマのヨハネがその福音のゆえに捕らえられ、獄中にいたが、そのヨハネがイエスのみわざを聞いた時、「おいでになるはずの方はあなたですか。、それとも、別の方を待つべきでしょうか」と弟子たちを通じてイエスに問いかけたことがある。ヨハネは悪人をさばくメシヤとしての期待をイエスに寄せていたのかもしれない。しかし一向にイエスはそのような行動を起こされない。それでヨハネはイエスが自分の期待に反したので、イエスが真のメシヤであるかを問うたのである。これに対してイエスはヨハネの弟子たちに答えられた。→マタイ 11:4~6「あなたがたは行って、自分たちが見たり聞いたりしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人たちが見、足の不自由な者たちが歩き、ツアラアトに冒された者たちがきよめられ、耳の聞こえない者たちが聞き、死人たちが生き返り、貧しい者たちに福音が伝えられています。だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです」

ここでイエスのご自分が父なる神から遣わされた真の救い主メシヤであることの一つのしるしとしてツアラアトに冒された者たちをきよめる働きを示しておられることが分かる。バプテスマのヨハネの望んだ世の救い主の姿とは異なっていたが、イエスこそご自分の死をもって人々の罪を贖うまこ

との救い主なのである。→ヨハネ3：16

[4]「イエスは彼に言われた。『だれにも話さないように気をつけなさい。ただ行って自分を祭司に見せなさい。そして、人々への証しのために、モーセが命じたささげ物をしなさい。』」

「モーセが命じたささげ物」とはツアラアトが治った時にその状態を祭司のところに行って見せ、祭司からきよいと宣言されてから、ささげるように命じられたささげ物のこと。→レビ14章 当然それは祭壇のあるエルサレムの神殿にまで行ってささげるべきものであった。それゆえイエスはツアラアトを癒された彼にエルサレムにまで行って、自分を祭司に見せ、公に治った、きよめられたものとなったことを証明してもらいなさいと言っているのである。

では「だれにも話さないように気をつけなさい」とはどういう意味か。ツアラアトを癒された男がだれにも話さなくても、そこには多くの群衆がいたので、うわさがうわさと呼んで、この話は広がっていくに違いない。それゆえこの意味は彼がエルサレムに行く道中で自分に起こったことをあれこれ言いふらしたりせず、道草を食わず、一刻も早く祭司のもとに駆けつけて、正式の承認を受けなさいという意味なのである。なぜなら、もしイエスに敵対しているユダヤ教の祭司たちの耳に本人の到着よりも早くイエスがツアラアトに冒されていた男を癒された、きよめられたということが伝わったならば、彼らはイエスによってなされたその事実を認めず、きよめられたことを正式に認めようとしなないかもしれないからである。そうなれば一番困るのはツアラアトであった本人である。それゆえイエスは一刻も早く人のうわさが届く前にエルサレムへ行って祭司に見てもらい、人々への証しのためにレビ記に書かれているささげ物をしなさいと彼に言われたのである。

これはツアラアトがイエスの奇跡によってきよめられたとはいえ、やはり律法に書かれていることは守る必要があるということの意味している。

すなわち、旧約聖書を信じるユダヤ教の祭司たちが異端視していたイエスこそが「律法や預言者を廃棄するためではなく成就するために来た」(マタイ5:17)お方だということを証明することになるのである。

神の恵みによって救われるということは神の戒め、神の命令をないがしろにしてよい理由にはならない。しかし、私たちが覚えておかなければならないことは、イエス・キリストが私たちの罪の贖いのまことの神の小羊として十字架上できよいのちをささげられた時に旧約聖書の儀式律法はすべて成就され、それ以後の時代はこのような動物のささげ物をする必要はなくなっているということである。

しかしまたそれゆえになお一層の感謝をもって神のみことばに従い、天の

父なる神のみこころを行っていく必要がある。

私たちはツアラアトに冒された人のように自分で自分の罪をどうすることもできない者であった。それゆえに、私たちは「わたしの心だ。きよくなれ」と言われたイエス・キリストの愛、神の愛、神の恵みにより頼み、それによって死に至る病、罪を贖われたものとして感謝をもって主に従い続けていく者となっていきたい。